

第3節 鹿児島県の陥し穴遺構について

1. 本県での調査・研究史

本遺跡を含めて陥し穴の検出例が近年増加しており、発見が珍しくなくなってきたのは最近のことである。ここでは、まず鹿児島県での調査・研究史を振り返り、同時に全国的な研究動向にも若干ふれて整理しておきたい。

今村啓爾氏による1973年の『霧ヶ丘』の報告は、陥し穴に関するほとんどの諸問題を呈示したものであり、陥し穴研究の出発点とも言えるものであった。

本県での最初の発見は志布志町倉園B遺跡（瀬戸口1984）であり、縄文時代早期のもので楕円形を呈し、底面中央に小穴があるものが2基発見された。底面に小ピットがあることより陥し穴を意識した報告となっている。1986年には熊本県大丸・藤ノ迫遺跡（木崎1986）で13基検出され、小穴を有する土坑として他の土坑と区別され、陥し穴に近似すると報告されている。

1987年枕崎市奥木場遺跡の報告書では、底面に小穴が2列4個の計8個認められるものをこれまで発見されている陥し穴の小穴とは数が異なるが陥し穴遺構に類似すると取り上げ、また長方形で小穴のない深い土坑を陥し穴の可能性が考えられると報告（宮田1987）している。本県の調査ではこの段階まで普通の土坑と同様に上面からのみ掘り下げを実施したのが通常であった。しかし、菊池実氏による断面スライス方式の実践例の報告（菊地1987）がなされたのもこの年であった。

1989年富永直樹氏は九州の陥し穴を集成（富永1989）し、九州での陥し穴研究の先鞭をつけた。なおこのなかでは鹿児島県の例として倉園B遺跡例と奥木場遺跡例はもれて栗野町山崎B遺跡と桑ノ丸遺跡の土坑が取り上げられている。これらの土坑は報告書では性格不明の土坑とされているものであるが、小穴はないものの形態は類似している。

1993年は松元町仁田尾遺跡で旧石器時代細石刃文化の陥し穴が発見され、また国分市上野原遺跡で縄文時代後期の大型陥し穴が直線状に並んで検出されるという画期の年であった。仁田尾遺跡例は長方形あるいは楕円形を呈し、下面に複数の小穴を持つものであり、クイ跡を正確に調査するために底面を横からスライスする方法を実施した調査であった。同時に陥し穴の型取りと土層転写も実施された。上野原遺跡でも横からの調査も並行して行われ、また土層転写も行われた。

稻田孝司氏は西日本の陥し穴について、内部施設を注目した論考を発表（稻田1993）している。

1994年仁田尾遺跡では小穴の精密な調査によりクイ痕跡の検出を行い成果を上げた。旧石器時代の陥し穴として出水市大久保遺跡でも、次の年には入来町鹿村ヶ迫遺跡でも検出された。このことは旧石器時代南九州では広い範囲で陥し穴が行われていたことが明らかとなった。偶然にも両遺跡の調査担当者は前年に仁田尾遺跡の陥し穴の調査に研修で参加していた。1994年に高橋信武氏は九州の陥し穴の変遷を発表している。このなかで鹿児島県の陥し穴は、山崎B、奥木場、倉園B、仁田尾に加えて川内市西ノ平の土坑を入れ、先に富永氏が入れた桑ノ丸例は除かれている。

1996年には鈴木忠司氏が、岩宿時代の陥し穴の全国集成と、岩宿時代以後の陥し穴の変遷を発表（鈴木1996）している。

1997年には本遺跡のほかに、溝辺町曲迫遺跡と東免遺跡で縄文時代中期の陥し穴が検出された。

1998年・1999年には東九州自動車道建設に伴う調査において、前原和田、供養之元、永磯、耳取、

桐木、九養岡など福山町・財部町に所在する多くの遺跡で縄文時代中期の陥し穴が検出された。また竹ノ山B遺跡では細石刃文化の陥し穴が発見された。

2000年には上野原遺跡D地点の報告書が刊行され、大型陥し穴の報告がなされ、同時に県内の陥し穴が集成された（中村ほか2000）。

2. 陥し穴の時期と形態及び変遷

本県で検出された陥し穴は第23表に示したとおりであり、旧石器時代細石刃文化から縄文時代後期まで総計約150基以上が発見されている。調査面積にも関係すると思われるが、一つの遺跡で検出されている数は上野原遺跡を除くと多くない。

本県では時期の明確な火山灰が多く、例えば薩摩火山灰、アカホヤ火山灰、御池火山灰などが陥し穴の底面や上部に堆積しており、時期を特定する決め手になっている。仁田尾遺跡や鹿村ヶ迫遺跡は薩摩火山灰の下に掘り込まれており、また縄文時代早期のものはアカホヤ火山灰の下で掘り込まれている。縄文時代中期の供養之元遺跡などの例は御池火山灰が底面や内部に堆積している。このように火山灰により時期が確実におさえられるものが多いのが特徴である。

他の地域であまり類例がない時期ではあるが、本県では旧石器時代細石刃文化の陥し穴が4遺跡で検出されている。また、縄文時代草創期・早期・中期・後期と明確な火山灰で区別された各時期の陥し穴が検出されているのも特徴である。

本県で検出された陥し穴の形態は、第79図のように長方形あるいは楕円形と、円形とに大きく区別でき、また円形のものは直径・深さで細別される。長軸の最大長は2mを越す例から約1mに満たないものまで様々である。底面のクイの小穴は多数認められるものから全く無いものまで存在している。以下、各火山灰により区別された陥し穴の変遷は次のようになる。

旧石器時代細石刃文化の陥し穴は、長方形あるいは楕円形を呈しており、基本的に底面施設としての小穴を有している。小穴の数は一定しないが中心に1列並ぶものや複数列並ぶものが認められている。仁田尾遺跡の例では中心に小穴が並ぶものは、各々に複数のクイを立てたものであり、複数列の細い小穴は各々クイを1本ずつ立てたものであることが確認されている（宮田1996）。しかし、宮崎県別府原遺跡（日高1998）例では円形や楕円形を呈し、小穴のないものも多いという。

縄文時代早期の陥し穴はいずれも中葉から後半の時期のみであり、長方形ないし楕円形を呈し、底面の小穴は細石刃文化のものと同様のもの、あるいは中央に1個のものや複数認められるものその他に全く無いもののが存在し多様性がある。

縄文時代中期の陥し穴は最近多くの遺跡で検出例が増加しており、長軸が長い長方形を呈し、底面の小穴は無いものと少数あるものが認められている。

縄文時代後期の陥し穴は上野原遺跡のみの検出例であるが、列状に並ぶ配置であり、多数の検出が行われている。形態は円形を呈し、小型で小穴をもつものともたないもの、そして大型で深く小穴がないものに大別できる。

この他の形態として高橋信武氏はハイヒール型を設定しているが、これについては地下茎植物採掘痕の可能性が高い（東1999）と考えられる。

長方形あるいは楕円形の陥し穴の長さと幅に関しては、遺跡により差異が認められる。例えば大

久保遺跡の長軸の長いものと仁田尾遺跡の短いものの違いは、対象動物におけるシカとイノシシの違いと言うような差に起因する可能性が考えられようか。

これまで検出された陥し穴の時期ごとの形態は、長方形ないし楕円形という細石刃文化以来の形態が、中期になると長方形になり、後期では円形となるという形態変遷が予想されるが、あくまでも本県の現在時点の結果であり、宮崎県の例によると各地域で細かい差があるようだ。

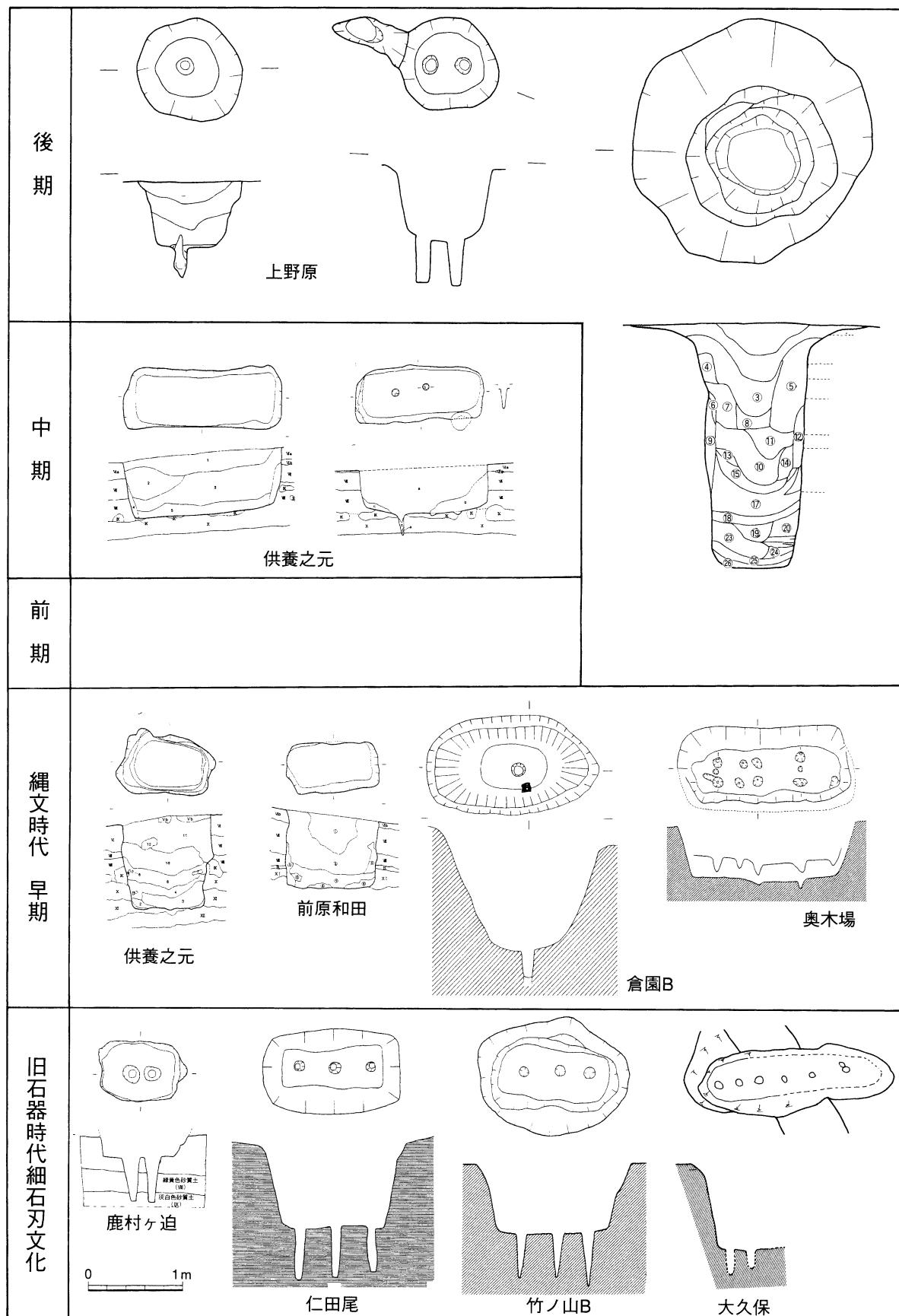
3. 陥し穴の配置と獵

本県の検出例によると、細石刃文化期・縄文時代早期のものはそれぞれ単独で、あるいは少し距離をおいて検出されており、列配置ではなく、各々個別の単独陥し穴と考えられる。最近検出例が増加した縄文時代中期も同様である。

縄文時代後期の上野原遺跡例は数mおきに直線状に並ぶという典型的な列配置であり、他の時期及び他の遺跡例とは全く異なるものである。このように多くの陥し穴を列配置することは、設置する仕事量の多さから集団の構成人数が多いことが推定され、また陥し穴獵の方法の違いがあると考えられる。後期の列配置は、中間に柵をつくり集団による積極的な追い込み獵の可能性が高く、陥し穴獵の画期が存在したと推定される。

第23表 鹿児島県の陥し穴地名表

| 遺跡名 | 所在地 | 時代 | 基数 | 形 状 | 底面小ピット | 備 考 | 文献 |
|----------------|---------|---------------|--------|----------------|-------------|--|----|
| 仁 田 尾 | 日置郡松元町 | 旧 石 器 | 17 | 長 方 形 楕 圓 形 | 2~10個 | 打ち込み杭のものと10~15cmの小穴に2~3本の細い杭を埋めたものがある。 | 31 |
| 大 久 保 | 出水市上場 | 旧 石 器 | 1 | 楕 圓 形 | 7個 | 埋土中に剥片・チップ | 3 |
| 鹿 村 ケ 迫 | 薩摩郡入来町 | 旧 石 器 | 2 | 略長方形 | 2個・3個 | | 25 |
| 竹 ノ 山 B | 日置郡伊集院町 | 旧 石 器 | 2 | 楕 圓 形 | 3個 | | 9 |
| 桐 木 | 曾於郡末吉町 | 縄文草創期 | 1 | 楕 圓 形 | 2個 | | |
| 城 ケ 尾 | 曾於郡財部町 | 縄文草創期 | 1 | 楕 圓 形 | 3個 | | |
| 前 原 和 田 | 姶良郡福山町 | 縄文草創期 早期 | 2 1 | 楕 圓 形 楕 圓 形 | 0個・5個 0個 | | 4 |
| 倉 園 B | 曾於郡志布志町 | 縄 文 早 期 | 2 | 楕 圓 形 | 各1個 | | 15 |
| 奥 木 場 | 枕崎市東鹿籠町 | 縄 文 早 期 | 1 | 楕 圓 形 | 2列8個 | | 28 |
| 城 ケ 尾 | 姶良郡福山町 | 縄 文 早 期 | 3 | 楕 圓 形 | 3~6個 | | |
| 耳 取 | 曾於郡財部町 | 縄 文 早 期 | 1 | 楕 圓 形 | | | |
| 供 養 之 元 | 姶良郡福山町 | 縄文早期 縄文中期 | 3 2 | 長 方 形 | 0個 0個・2個 | | 22 |
| 曲 迫 | 姶良郡溝辺町 | 縄 文 中 期 | 8 | 略長方形 | 有(1~3個) | | |
| 東 免 | 姶良郡溝辺町 | 縄 文 中 期 | 16 | 略長方形 | 1個・11個 | 小ピットなし 3基 | |
| 永 磯 | 姶良郡福山町 | 縄 文 中 期 | 19 | 楕 圓 形 | 有(1~3個) | | |
| 耳 取 | 曾於郡財部町 | 縄 文 中 期 | 12 | 楕 圓 形 | 3個 | | |
| 九 養 岡 | 曾於郡財部町 | 縄 文 中 期 | 2 | 楕 圓 形 | | | |
| 上 野 原 | 国分市上之段 | 縄 文 後 期 | 79 | 円 形 | 0~2個 | 深さで2類に分類 | 21 |
| 根 木 原 | 垂 水 市 | 旧石器? | 12 | 長 方 形 | | 薩摩火山灰の下位 | |
| 桜 ケ 丘 キャンパス | 鹿 児 島 市 | 旧石器～ 縄文草創期 | 1 | 長 方 形 | 4個 | 薩摩火山灰の下位 | 41 |
| 七 ツ 谷 | 姶良郡吉松町 | 縄 文 早 期 | 15 | 長 方 形 | 2~6個 | | 42 |



第79図 鹿児島県の陥し穴の変遷

参考文献

- 1 稲田孝司「西日本の縄文時代落し穴獣」『論苑考古学』天山舎 1993
- 2 今村啓爾「縄文時代の陥穴と民族誌上の事例比較」『物質文化』No.27
- 3 岩崎新輔『大久保遺跡ほか』出水市埋蔵文化財発掘調査報告書 (6) 1997
- 4 大保秀樹『前原和田遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (36) 2002
- 5 鎌田洋昭「帖地遺跡における帖地型石鏃について」『ドキどき縄文さきがけ展図録』指宿市教育委員会 1999
- 6 菊地 実「縄文時代の陥し穴調査法と派生する諸問題」『研究紀要』4 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
- 7 木崎康弘『蒲生・上の原遺跡』熊本県文化財調査報告書 第158集 1996
- 8 木崎康弘『大丸・藤ノ迫遺跡』熊本県文化財調査報告書 第80集 1986
- 9 黒川忠弘・桑波田武『竹ノ山A・B遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (29) 2001
- 10 桑波田武・宮田栄二「鹿児島県における旧石器時代研究の現状と課題」『鹿児島考古』31号 1997
- 11 佐藤宏之「陥し穴獣と縄文時代の狩獵社会」『考古学と民族誌』六興出版 1989
- 12 鈴木忠司「岩宿時代の陥穴状土坑」『下原遺跡Ⅱ』静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996
- 13 鈴木忠司「岩宿時代の陥穴の変遷とその背景」『下原遺跡Ⅱ』静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996
- 14 関 一之『山元古窯跡』加治木町教育委員会 1995
- 15 濑戸口望『倉園B遺跡』志布志町埋蔵文化財報告書 (7) 1984
- 16 高橋信武『宇佐別府道路・日出ジャンクション関係埋蔵文化財調査報告書』大分県教育委員会 1993
- 17 高橋信武「九州の陥し穴の変遷」『先史学・考古学論究』龍田考古学会 1994
- 18 時任和守ほか『長蘭原遺跡』宮崎県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第57集 2002
- 19 富永直樹「九州のおとし穴遺構について」『安武地区遺跡群Ⅱ』久留米市文化財調査報告書 第60集 1989
- 20 中村和美「鹿児島における古代の在地土器」『鹿児島考古』第31号 1997
- 21 中村耕治ほか『上野原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (27) 2000
- 22 野辺盛雅・山崎克之『供養之元遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (36) 2002
- 23 東 和幸「地下茎植物採掘痕と考えられる掘り込み」『貝塚』第57号
- 24 日高広人「九州における細石器文化期の遺構について」『九州の細石器文化Ⅱ』 1998
- 25 藤井法博『鹿村ヶ迫遺跡』入来町埋蔵文化財発掘調査報告書 (6) 1997
- 26 前迫亮一「南九州縄文時代早期前半の居住活動に関する一予察」『大河』第5号 1994
- 27 松藤和人「南九州における姶良T字火山灰降下直後の石器群の評価をめぐって」『考古学と生活文化』 1992
- 28 宮田栄二・旭慶男『奥木場遺跡』枕崎市埋蔵文化財報告書 (3) 1987
- 29 宮田栄二「鹿児島県下の石器の材質」『大河』第5号 1994
- 30 宮田栄二「陥し穴(鹿児島県)」『旧石器から縄文へ』鹿児島県考古学会・宮崎県考古学会 1995
- 31 宮田栄二「鹿児島県日置郡松元町仁田尾遺跡」『日本考古学年報』47 1996
- 32 宮田栄二「南九州における細石刃文化終末期の様相」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念論文集 1996
- 33 宮田栄二「鹿児島県の非黒曜石石材と原産地」『石器原産地研究会 第1回研究集会資料』 2002
- 34 石川県立埋蔵文化財センター編『鹿島町徳前C遺跡調査報告(IV)』 1983
- 35 大分県教育委員会編『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財調査報告書(1)』 1988
- 36 北九州市教育委員会編『高津尾遺跡—第14地点—』北九州市文化財調査報告書 第47集 1989
- 37 北九州市埋文調査室『鳴水・古屋敷遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書 第108集 1991
- 38 国立歴史民族博物館編『日本出土の貿易陶磁 西日本編3』 1993
- 39 大宰府市教育委員会編『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』 2000
- 40 宮崎県教育委員会編『山内石塔群』 1984
- 41 鹿児島大学総合研究博物館『ニュースレター』No.2 2001
- 42 吉松町教育委員会『七ツ谷遺跡』吉松町埋蔵文化財発掘調査報告書 (4) 1999